山根巴氏著

『中村憲吉の研究』

中村憲吉の推敲歌稿の残存のことであったと記憶するが、学生の頃そのことについて金子金治郎先生から拝聴したことがある。著者の憲吉研究への接近は、或いはその頃、すなわち昭和三十年頃から始まったのではないかと、ひそかに思っている。そのいうならば萌芽が、著者の「中村憲吉が、島木赤彦や斎藤茂吉とともにアララギ派の主要歌人であることはあらためて言うまでもあるまい。けれども、例えば〝日本近代文学大系〟全六十巻（角川書店）においては、茂吉は一人で一冊を持つが、赤彦は伊藤左千夫、長塚節と三人で一冊を持ち、憲吉は遂にその座を持たずじまいである。ここで、その憲吉の扱いに対して不満を述べるつもりはない。それよりも、所詮はそういうものだろうという思いがしていることを言っておこう。」、また「私が憲吉研究を今日まで続けて来ているのは、第一には、何よりも彼の人柄と作品に強くひかれるからにほかならない。端的に言って、とにかくこの人の歌が好きなのである。」という限りない愛着に支えられて、枝葉を持つ樹木となったのがこの「中村憲吉の研究」ではないかと思う。

本論は五章、すなわち「生涯とその文学」・「作風形成への研鑽」・「近代短歌史における位相」・「年譜」・「研究文献」からなる。第一章は「序―生涯―歌風の展開―歌風の本質―歌論・歌語り―結び」と細目が立てられ、いうならば歌人憲吉を通覧したもので、歌風の本質には「私はかねて、①『懇篤忠実なる写生』、②重厚なる声調、③叙事連作法の三つを、憲吉短歌における方法の根本的なものと考えているが、思えば、これらはまた『稚拙』克服―『拙修』への方法であり、その実際でもあったと言えよう。」といった見解がみえる。第二章は「記紀・万葉の受容」、「歌人憲吉の誕生」からなり、その各々は二つの論考からなる。後者の「拙修の道」では「しがらみ」の資料で考察が展開されており、「心会の友―卓造とのかかわり」では若き日の憲吉に最も影響を与えた堀内卓造との交友状況が論じられている。第三章は「憲吉調の確立と開花」・「文体論から見た特質」からなり、前者は「磯の光考」・「作品が語る表現美」、後者は「あお（青・蒼）の用法」・「已然形止めの句法」・「字余りの表現法」からなる。「磯の光考」には「憲吉の作品史上において、第三歌集「しがらみ」を歌風―自己―確立期の所産とみれば、ひるがえって、その萌芽をどこに求めるかが、当面の問題となってくる。ここで概括的に言えば、大正五年中の作品すべてがそれに該当するかも知れない。が、私はとくに〈中略〉鞆の浦に旅をした時のつきつめた感情をうたいあげた『磯の光』三十四首にそれを求めたい。」といった新見がみえる。「作品が語る表現美」では三十回にわたって憲吉の歌がとりあげられ、「憲吉の場合ほど、人間と作品とが調和を保った人が、他に多くあったとは思えない。」と、人と歌とのかかわりで結ばれている。外側からに対して内側からのものとして「文体論から見た特質」がある。ここでは、憲吉作品にみられる顕著な外的特徴の三つがとりあげられ、論じられている。その一つ「あお（青・蒼）の用法」では、「馬鈴薯の花・林泉集時代―しがらみ時代―軽雷集時代―軽雷集以後時代」の区分に従いその使用度数が調査され、「歌人にとって作歌することと生活することとが切りはなしえない」点がみちびき出されている。第四章の「年譜」は単なるそれではなく、憲吉について語られ論じられたあらゆる資料を踏まえてできあがったものである。第五章には「今後の研究への視点」も述べられている。読後、資料の博捜に驚き、また多くの研究分野が鮮明に浮上するを覚えた次第である。（昭和五二年一月三一日、笠間書院刊、A五判、四三二ページ七〇〇〇円）（竹本宏夫）